【表紙】
南極猛鯨狩　全二巻

【表紙　裏】

【1頁】
（十六ミリ）
南極猛鯨狩
全二巻　二三七米

台湾総督府
O第五九六号
検閲済
有効期間
自昭和十六年四月十二日
至昭和十九年四月十一日

活動写真「フィルム」検閲規則第十条第二項ニ依リ手数料ヲ免除ス

障害ナシ

【2頁】

【3頁】
「南極猛鯨狩」　全二巻
梗概
〝海国日本が躍進しつつある南氷洋を舞台の捕鯨界を
如実に現す
一万二十噸の捕鯨工船図南丸が五隻の捕鯨船を従へ
大阪港を出発南氷洋へ進出して捕鯨の有様又捕鯨
の解剖処理などを撮影せるものなり〟　（完）

第一巻

T1〝サクラグラフマーク〟サクラグラフSAKURAGRAPH
T2〝南極猛鯨狩〟

【4頁】
T3〝構成　日活文化映画部〟撮影　岩崎　繁
T4〝一万二十噸の捕鯨工船図南丸は五隻の捕鯨船を従
へ躍進海国日本の捕鯨事業を代表し
T5〝南極を目指し万里の壮途に上るべく大阪港を出て
行く〟
T6〝押入　東半球地図〟
T7〝故国を去って三週間目濠州ジドニー港に到着〟
T8〝こゝで今後数ヶ月間に使用する物資主として石炭
や食料品を積込む〟
T9〝押入　東半球地図
申請前一字抹消　T10〝南緯四十五度からの一帯は荒天圏といはれ■一年を

【5頁】
通じて最も荒水の甚しい海である〟
T11〝押入　東半球地図
T12〝更に進んで南緯五十度以南に横はる濃霧圏
内へ……〟
T13〝押入　東半球地図〟
T14〝南氷洋特有の頂きの扁平な氷山が見え初める〟
T15〝いざ活躍の舞台〟
T16〝四島砲手は捕鯨界で日本一といはれる名手〟
T17〝銛の先には火薬が装填され鯨の体内に射ち入
れて炸裂し根元の銛爪が開いて引掛る
T18〝一発では死なない大変な力で逃げる　船は逆はずに網

【6頁】
を延ばす〟
T19〝段々弱って来るのを待って網を捲きつけ更に第二弾を〟
T20〝この鯨は白長髭須といふ種類である

第二巻

T1〃腹部に管を通し空気を送って沈まぬ様にする〃
T2〃邪魔な尾を切り捨てる
T3〃南へ／＼捕鯨船の活躍は続く
T4〃南極の夏4ヶ月間に此の捕鯨船隊が漁獲した
鯨は実に百三十九頭――〃
T5〃持帰った鯨は母船の後部スリップウェイか□□□
上げられる〃

【7頁】

T6〃滑りをよくする為に水をかける〃
T7〃この白長髟須鯨は長さ九十尺目方は百噸もある〃
T8〃すぐに解剖処理が始まる
T9〃文字通り血の河〃
T10〃骨は機械鋸で〃
T11〃甲板から投げ込まれた原料はカッター（裁断機）
ボイラー（圧力釜）等を通って搾りその油は〃
T12〃セパレーター（分離器）で精製され完全な鯨油になって船
底の大きなタンク（油漕）に集まる〃
T13〃押入　線画にて船底の説明〃
T14〃無線電信が七千海哩を距てゝ本国日本へそれから

【8頁】

英国へ
申請前二字抹消　T15〃海路遙々と呼び寄せた英国の仲■買船と
T16〃鯨の巨体をフェンダーにして―〃
T17〃南氷洋上の取引向ふからは野菜其の他の食料品
を〃
T18〃こちらから五十噸の鯨油〃
T19〃元来捕鯨はイルウェーイ人の特技であって南氷
洋に進出する外国工船の殆んど全部は彼等
の手に占められてゐる
T20〃押入　東半球地図〃
T21〃この好敵手を向ふに廻して建闘した我捕鯨隊

【9頁】

の成功は海国日本が南氷洋に掲げた新しい凱
歌である〃
（全巻終り）

【データ採録者：加藤宏明】
【データ校正：青木学】